

# 世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

Robot makes the cut at Linley Valley  
オーストラリア

## リンレイ・バレーではロボットが豚肉を処理する



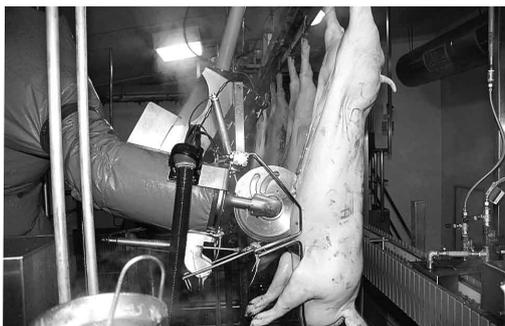
映画『マッドマックス』にでも登場しそうな見た目も恐ろしいレーザー誘導式豚肉カットロボットが西オーストラリア州で稼働している。70万ドルもするこのロボットはクレイグ・モスティン・グループが所有するウーロー市のリンレイ・バレーにある食肉処理場に設置されており、地元では国内第一号機として大評判だ。

全体を正確に測定できるので、ロボットが個体ごとに解剖学的な特徴に従って肉を切り分けるようにプログラムすることができる。同グループの精肉家畜部門の経営幹部がこのプロジェクトの責任者でもあるディーン・ロマニエロ氏によれば、ロボットによる精密な解体処理作業で肉の汚染を防ぎ、無駄を省けるという。

「内臓を抜き取るための開腹作業の工程にはレーザー誘導式骨ノコギリは不可欠で、手動作業のミスで起こる胃の破損事故が4%から1%未満に抑えられます」と彼は説明する。

現在のリンレイ・バレーの生産規模に基づけば、毎年、2000頭以上の豚肉が作業時に汚染されていた計算になるが、このロボットの作業によってその数が5000頭以下に減少したことになる。

このレーザー誘導式解体ロボットはオーストラリア政府・食品インベション事業に対する補助金に加えて、フード・エキップメント・オーストラリア社、バンス・ミート・テクノロジーズ社（ドイツ）、オーストラリアンポーク社、西オーストラリア養豚生産者協会、そしてポーク・コーポレーティブ・リサーチ・センター社からの投資で支えられている。



オーストラリア初となるレーザー誘導式食肉加工ロボットが西オーストラリア州ウーロー市にあるクレイグ・モスティン・グループのリンレイ・バレー食肉処理場で稼働中だ。

John Deere shakes up its dealer network in the Netherlands  
オランダ

## ジョンディア、オランダの販売ネットワークを再編



ジョンディアはディーラー・ネットワークを再編するために、ナイメーヘン市で輸入業を営むルイス・ネーゲル氏との取引関係を解消した。米国の農業機械の巨人は、現在、20以上のいわゆるA級ディーラーを一挙に8団体に減らし、ネットワークを縮小しようと考えている。

この合理化を成し遂げるためには、A級ディーラーが各担当地区の下位取扱業者と合併してもらわねばならないが、少なくとも51%の取引業務を引き継ぐことが前提となる。当然、こうした動きはオランダ国内でかなりの物議を醸した。

その結果、すでに2人の大物ディーラーはくら替えしてクラス社に忠誠を誓い、追隨者が出るかもしれないが、クラス社以外のメーカーと契約する可能性もある。

アムステルダム市の北部地区では特に状況が緊迫している。同地区を担当する4社の旧A級ディーラー、そのうち3社が、ジョンディアから留任を認められた1社に協力する意思を示したのだが、同地区の下位業者たちは合併も業務の引き継ぎも拒否しているのだ。もしもこの3社が現在の地位にとどまろうとすれば、独占販売権は失うことになる。それでも非公式に緑と黄色の製品を取り扱えるだろうが、トラック本体も部品も入手できずに苦労することになるのではないか。

一方、留任するA級ディーラーはジョンディアの方針に従って前任者が担当していた地区に新しい下位ネットワークを構築して自身の業績を上げることになるだろう。



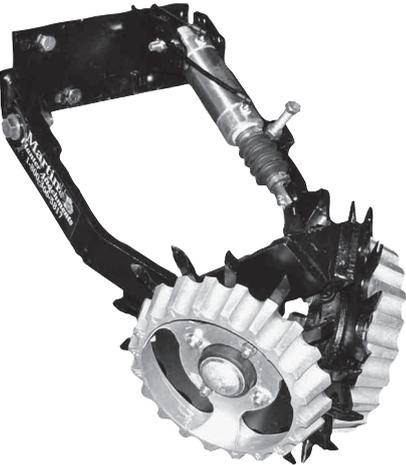
ジョンディアはオランダ国内で販売ネットワークの大規模な再編に着手した。



## Cleaning up the seedbed

米国

## 播種床をきれいに



オペレーターは播種床に与える空気圧を変えられ、それは速く簡単に自在に調整できる。  
動画は<http://www.precisionplanting.com/>でチェック可能。

同システムはシリンダー部分に空気が流れ込む設計になっているが、新たにコンプレッサーを購入してもよく、負荷に耐える余裕があれば既存の装置も利用できる。空気圧は作業中でも運転席で簡単に調整できる。もう一つの重要な特徴は、もしもオペレーターが加えた圧力でクリーナー・ユニットが石に打ち付けられても先端部分は柔軟に曲がるように設計されている点だ。

同社によると、同システムの特徴はオペレーターの操作で播種床に20〜30ポンドの空気圧を加えて、播種前にどんなに重い残さ物も一掃してしまえることだ。播種を妨げ根付きを悪くするような厄介者が取り除かれるのだ。

親しい農業者の調査によると同システムの効果で「エーカー当たり発芽数が2000〜3000株増えていることが確認され、これによって10〜15%の増収が見込めるという。」



不耕栽培を採用しているときれいに整った苗床を作るのは容易な仕事ではない。土壌の性質は千差万別で、残さ物の量も違うからだ。この悩みを解消しようとイリノイ州トレモント市を拠点とするプレシジョン・プランティング社は、新たに特許を取得した播種床整地システムを昨年テスト市場で発表し、いよいよ今年、ディーラーを通して米国とカナダ、南アフリカ、ニュージーランドとオーストラリアで購入可能になった。

## Fertiliser spreader stands tall in the growing maize crop

南アフリカ

## トウモロコシ畑に堂々と立つ肥料散布機



ジョンディア4730型自走式スプレイヤーに搭載されたアマゾーネ社製1501ProfiS Hydro型肥料散布機の下に立つクラス・ベントナー氏の子息ジャーニー氏。  
[http://www.amazone.net/\\_contentonly/26.asp](http://www.amazone.net/_contentonly/26.asp)

御の肥料散布に対応していること、3000ℓまで増やせるホッパー最大容量……といった理由から、大型の肥料散布機を自走式スプレイヤーに取付ける組み合わせは理想的なのだそう。

ジェイコブス氏に成功要因を聞いた。PTO駆動やエンジン回転から独立した自動運転、オンライン化された重量測定キャリブレーションの搭載、ヨーロッパ製に比べて粒が揃わない南アフリカ製の肥料でも粉上に砕かれないという肥料散布機構のSBSシステム、GPS制御の肥料散布に

乾き次第、散布する予定だ。

地元の農業機械ディーラー、ウィレム・スモルバーガー氏から農場で稼働中のジョンディア4730型自走式スプレイヤーに肥料散布機を搭載するよう助言を受けた。ベントナー氏はアフグリ社グルートヴィル支店のダウィー・ジェイコブス氏に依頼して、油圧駆動で作業幅36mのアマゾーネ社製1501ProfiS Hydro型肥料散布機を取付けた。結果的にこの組み合わせは成功し、現在までに1haあたり250kgの尿素肥料を200ha以上に散布し終えた。残りの農地にも十分に



ム・マランガ州グルートヴィレイ市でトウモロコシを生産する農業経営者のクラス・ベントナー氏は、季節はずれの豪雨で窒素肥料を施す最適なタイミングを逸してしまった。やっと農地が乾いてトラクタが入れるようになった頃には作物が育ち過ぎて、通常の施肥作業ができない状態になっていた。液肥を使う手もあったが、不正確な植付けが災いして畝幅が一定せず、重複散布の危険があつて断念せざるを得なかった。